発　行
北海道ポーランド文化協会
〒001-0032
札幌市北区北 32 条
西 5 丁目 2-32-902
佐光方
電話・FAX
011-790-8610

POLE

第 77 号　2012. 12. 1
北海道ポーランド文化協会会誌

ポーランドの民族衣装で
祝賀会に参加した女の子

Happy 25th Anniversary ！

北海道ポーランド文化協会
創立25周年！

Tekst toastu pana Ambasadora Cyryla Kozaczewskiego
podczas spotkania z Towarzystwem Hokkaido-Polska
w dniu 3 listopada 2012 roku

Cieszę się, że mogę tu być dziś z Państwem i uczcić 25 rocznicę założenia Towarzystwa Hokkaido-Polsko w Sapporo. Gratuluję aktywnej działalności, która jest widoczna również w Tokio.

Postanowiłem jak najwcześniej przyjechać do Państwa, aby móc jak najdłużej współpracować z Towarzystwem podczas mojego pobytu w Japonii. Liczę na Państwa aktywność i zaangażowanie oraz nowe inicjatywy wzmacniające polską obecność na Hokkaido i w Japonii.

Gratuluję dotychczasowej postawy i życzę kolejnych lat współpracy z Państwem i z nowymi pokoleniami Polaków na Hokkaido.

Kampai!

ツィリル・コザチェフスキ駐日ポーランド共和国特命全権大使の祝辞

本日、この場でみなさまとお会いし、北海道ポーランド文化協会の創立 25 周年を共に祝うことができまして、たいへん嬉しく思います。みなさまの実に活発な活動は、東京でもよく伺っております。その活動に対し、心からお祝いの言葉を申し上げたいと思います。

私がこちらに来て、一刻も早くみなさまとお会いすることにしましたのは、私が日本に滞在する間、できるだけ長く、みなさまの協会と協力し合えるようにするためです。みなさまの精力的活動により、北海道と日本においてポーランドの存在を普及していただけますことを、大いに期待しております。

北海道ポーランド文化協会がこれまで築き上げてこられた地位に対しお祝いの言葉を述べるとともに、みなさま、そして北海道に住むポーランド人の新しい世代と共に、これからも協力し合い活動していくことを願っております。　乾杯！

2012 年 11 月 3 日

第26回定期総会報告

11月3日(土)午前 11時30分から「第26回総会」が開かれました。以下、ご報告いたします。

第1号議案 2012年度事業報告

1. 第25回総会: 2011年10月21日(金)北大クラーク会館 3 階国際文化交流活動室にて。18 時 30 分から総会、および懇親会。参加者:総会15名、懇親会36名。

2. 例会:

1)第59回例会: 講演会「樺太のポーランド人の軌跡―彼らはどこから来て、如何に生き、どこへ帰ったのか」講演は尾形芳秀氏。2012年3月31日(土)14時から「かでる2･7」510会議室にて。参加者27名。

2)第60回例会: 「ポーランド映画セレクションⅡ」2012年5月5日(土)～6日(日)、北大学術交流会館にて。参加者529名。

3)第61回例会: 「創立25周年ピアノコンサート」2012年5月12日(土)13時30分、札幌コンサートホールKitara小ホール、参加者281名。

4)第62回例会: 「午後のポエジア」2012年6月16日(土)、北大クラーク会館3階国際文化交流活動室にて14時から、参加者約30名。

3. ポーレ: 4回発行

第72号(2011年11月15日発行)、第73号(2012年2月25日発行)、第74号(2012年4月20日発行)、第75号(2012年6月8日発行)

4. 後援事業:

1)「伊那谷のタオイスト 加島祥造 詩画展」2011年10月11日(火)～25日(火)、群来陣(旧白鳥番屋)小樽市祝津3-191にて。

2)「アレンスキー生誕 150 年記念シンポジウム&コンサート」2011年11月27日(日)17時、札幌サンプラザホールにて。

3)「安田文子&ワルシャワデュオ～ワルシャワ･フィルコンサートマスターを迎えてのピアノトリオ～」2012年6月11日(月)19時、札幌コンサートホールKitara小ホールにて。

4)「林靖子先生追悼演奏会」2012年9月14日(金)、18時30分、札幌サンプラザホールにて。

5. 2012年度決算報告＜資料Ⅰ＞ご参照

6. 2012年度監査報告

平成24年10月1日エルプラザ内において、会計の監査にあたり、関係書類及び通帳を照合した結果、適正に処理されていることを確認致しましたのでここに報告します。

監事 小林 暁子、斎田 道子

第2号議案 2013年度事業計画

1. 第26回総会･創立25周年記念祝賀会

2012年11月3日(土)11時30分から、ニューオータニイン札幌2F北星の間にて。

2. 例会

1)第63回例会: 「21世紀のショパン像～『新書簡集』出版を祝って」2012年11月17日(土)14時30分～16時30分、北大情報教育館3階にて。

2)ショパン関連イベント(ミニコンサート、講演会など)、2013年3月上旬。

3)第3回ポーランド映画祭、2013年5月25日(土)～26日(日)、北大学術交流会館2F講堂にて(予約済み)。

4)その他(朗読会、講演会など)「午後のポエジア」第3弾、コペルニクス、ピウスツキに関する講演会など

3. ポーレ: 3～4回発行

4. 後援事業:

1)「“コルチャック先生”講演と学びのつどい&パネル展」2012年11月20日(火)13時30分からパネル展。16時30分に塚本先生講演。17時30分にW.タイス先生講演。19時10分から映画「コルチャック先生」を上映。

2)「松井亜樹ソプラノリサイタル」2013年3月15日(金)19時から。札幌コンサートホールKitara小ホールにて。

5. 2013年度予算書 ＜資料Ⅱ＞ご参照

第3号議案　2013 年度役員

（下線は新任）

▸会長：　安藤厚
▸副会長：　小笠原正明、霜田千代麿
▸運営委員：　安藤むつみ、氏間多伊子、薄井豊美、大久保律子、尾形芳秀、栗原朋友子、越野　剛、小林美保、　佐々木保子、高橋健一郎、富山信夫、塚本智宏、中島　洋、三浦　洋、安田文子、アグニェシュカ・ポヒワ、ラファウ・ジェプカ
▸事務局長：佐光伸一
▸監査委員：小林暁子、斎田道子
▸会計担当：氏間多伊子
▸副事務局長：栗原朋友子
▸事務局委員：ラファウ・ジェプカ
▸ポーレ編集委員：氏間多伊子、栗原朋友子、佐光伸一、ラファウ・ジェプカ

第4号議案　会則改正

（下線部を追加・修正）

第 15 条　本会に東京事務所をおくことができる。その担当者は東京地区在住の会員の中から運営委員会において選任する。東京事務所の活動状況は運営委員会に報告する。

第 16 条　本会の活動場所は、以下の通りとする。

（1987 年 10 月 2 日発効、1994 年 11 月 29 日、1998 年 10 月 17 日、2000 年 10 月 13 日、2001 年 11 月 30 日、2010 年 9 月 1 日、2012 年 11 月 3 日改訂）

第5号議案　その他

会費納入の郵便払込手数料について

以上

---------- 写真説明 ----------

A：　駐日ポーランド大使（中央）と通訳する佐光事務局長（右）
B：　大使と握手する斎田さんと大久保さん（右）
C:　総会議長役の尾形さんは当日の写真アルバムを大使にプレゼントされた。
D:　デコルテドレスの安田さん・Kitara オルガニストのカチョルさん・着物の氏間さん
E:　美しいピアノの調べは安田さん。
F:　酔いしれるボーカルはヨアンナさん。
G:　総会風景。
H:　協会を支えつづけてきた、栗原副事務局長（左）と斎田監事（右）

写真提供：　尾形運営委員

第1号議案　＜資料Ⅰ＞

2012 年度収支決算書

（2011 年 10 月 1 日～2012 年 9 月 30 日）

【収入の部】	予　算	決　算	内　訳	（単位:円）
会費	250,00	187,720	全額の 95%	
その他	0	17,687	ポ映画セレクションⅡ1.7 万	
小　計	250,00	205,407		
繰越金	206,14	206,140	郵便振替　134,030 円, 北洋銀行 340 円, 現金　71,770 円	
合　計	456,14	411,547		
【支出の部】				
事業費	200,00	158,683	第 59 回＜講演＞0.8 万, 第 60 回＜映画＞3 万, 第 61 回＜コンサート＞7.2 万, 第 62 回＜朗読＞4.9 万	
連絡費	60,000	49,700	ポーレ発送・はがき・切手他	
編集費	40,000	29,276	ポーレ制作費(72-75 号)4 回	
会合費	20,000	23,779	運営委員会	
事務費	15,000	19,580	トナー・文具・事務局補助	
予備費	20,000	53,555	故遠藤先生 1.6 万, 航空券 3 万, HP 関連 0.7 万	
小　計	355,00	334,573		
繰越金	101,14	76,974	郵便振替　5,320 円, 現金　71,654 円	
合　計	456,14	411,547		

【演奏部会基金】	収入の部	支出の部	備　考	（単位:円）
繰入金	357,371	0	2012 年 9 月 1 日, 北洋銀行(普)に開設	
合　計	357,371	0		

第２号議案　＜資料Ⅱ＞

2013 年度会計予算書

（2012 年 10 月 1 日～2013 年 9 月 30 日）

【収入の部】	前年度決算	予　算	内　訳	（単位:円）
会　費	187,720	180,000		
演奏部会基金取崩	0	150,000		
その他	17,687	0	銀行利息・寄付	
小　計	205,407	330,000		
繰越金	206,140	76,974		
合　計	411,547	406,974		
【支出の部】				
事業費	158,683	150,000	例会・総会	
25 周年記念事業費	0	150,000	記念誌刊行	
連絡費	49,700	35,000	ポーレ発送・はがき・切手他	
編集費	29,276	25,000	ポーレ制作費等	
会合費	23,779	20,000	運営委員会他	
事務費	19,580	15,000	電話料金・文具他	
予備費	53,555	11,974		
小　計	334,573	406,974		
繰越金	76,974	0		
合　計	411,547	406,974		

創立25周年祝賀会報告

平成24年11月3日(土)、北海道ポーランド文化協会第26回総会・創立25周年記念祝賀会が、ニューオータニイン札幌の2F北星の間で賑やかに行われました。

運営委員会では一年前から、25 周年は少し華やかに祝いたいと、4 人構成の「総会・祝賀会部会」を設け、出来るだけ多くの新旧の会員とポーランドの方たちに集まっていただきたいと申し合わせ、準備を進めました。

当日は会員その他 30 人、ポーランド人は大人 17 人、子供 6 人、そのほか特別参加者をあわせて 50 人以上が出席してくれました。

その中には、釧路在住で、最初のポーランド語の先生、カジミエシュ・コグトさんご夫婦＝写真上(右から)1、2人目＝、その後長い間ポーランド語を教えてくださった、東京在住の熊倉ハリーナさん＝写真上(左から)2人目＝、など懐かしい方たち。新しいところでは、東京在住の霜田英麿さんはじめ、今年一年の間に入会した会員が 6 人。そして、この 9 月に札幌コンサートホール Kitara の専属オルガニストとして来札したばかりのマリア・マグダレナ・カチョルさんなど、新旧うれしい方々が参加してくれました。

そして何より驚いたのは、この 4 月赴任したツィリル・コザチェフスキ駐日ポーランド共和国特命全権大使の突然のご出席の知らせでした。お忙しい大使は当日の朝、新千歳空港に着き、祝賀会に出席して、2 時半の飛行機で帰京する予定になり、それにあわせて急遽緻密な計画を立てました。

当日の午前中、大使に会いたいというポーランド人が大勢ホテルに集まり、祝賀会が始まるまで楽しいひとときを過ごしたようです。

総会が終わり、祝賀会が始まる前、総勢 50 人余の日本・ポーランドの仲間が記念写真に納まりました。

12 時 25 分、定時に祝賀会開始。

安藤会長は挨拶の中で、この 25 年を振り返りつつ、会の基礎を築いた方々、遠くから駆けつけてくれた方々、新しく会員になった方々などを紹介。又、設立当初からの趣旨である「文化の交流」を守り続けながら、地道に充実した活動を続けてきた協会の姿を語りました。

続いて特別のお客様ツィリル・コザチェフスキ大使のご挨拶でしたが、大変驚いたことに、立派な額に入った感謝状が用意されていました。ポーランドには感謝状という習慣はあまりないようですが、日本とポーランドの交流の中で、感謝の気持ちの表し方が見事に融合した、といえるかもしれません。

大使の乾杯のご発声の後、賑やかに祝宴が始まりましたが、まもなく大使はみんなと握手をし、名残を惜しみながら空港に向かいました。初めての北海道、初めてのポ文協、大使はどのような感想をもたれたでしょうか。

祝宴は楽しく進み、会話も盛り上がりました。後半のアトラクションは、安田文子さんのピアノ演奏で始まりました。ショパンの「ノクターン」「プレリュード」「英雄ポロネーズ」。いつ聴いてもショパンはいいですね。

続いて25年の歩み。設立当初からの会員である富山信夫運営委員と小笠原正明副会長が、25 年の思い出のあれこれを、懐かしい写真をプロジェクターでスクリーンに映しながら語ってくれました。

そのあとヨアンナ・クンツェヴィッチさんが「マイファニーバレンタイン」「ボディーアンドソウル」「枯葉」を、情感を込めて歌ってくれました。そして最後に「スト・ラト」を全員で大合唱、大いに盛り上がりました。

終わりに霜田千代麿副会長が参加者への感謝と協会のこれからの更なる発展を願って閉宴の挨拶を述べました。

この祝賀会を準備するに当たり、多くの日本人・ポーランド人双方の大きな協力がありました。心から感謝申し上げます。目標をはるかに超えた参加者、思いもかけなかった大使のご出席と感謝状、2時間がとても短く感じられたほどみんなが楽しんでくれたことなど、25 周年にふさわしい良い祝賀会だったと思います。

今後も地道に楽しく、充実した協会として活動していくことを心から願っています。

小林　暁子（総会・祝賀会部会＝こばやし・あきこ）

クヴィエチンスキ伝達式に

クヴィエチンスキ氏と彼の仲間たち。

ヴォッジミエジュ・クヴィエチンスキ（Wlodzimierz Kwiecinski）氏は現在、ポーランド空手道連盟議長（President of TKFP（Traditional Karate Federation of Poland: ポーランド名PZKT））および国際伝統空手道連盟副議長Vice-President of ITKF（International Traditional Karate Federation）]である。氏は、昨年の東日本大震災被災地の高校生30名をポーランド・ウッジ市郊外にある日本武道場（Japanese Martial and Sports Centre: Dojo-Stara Wies）に招待して彼らを励ましたこと（絆の架け橋プログラム）、および40年に渡る日本の伝統空手道を通じて日本武道、しいては日本文化のポーランド、欧州および世界への普及発展に貢献したことなどの功労により、本年4月29日付けで天皇陛下より「旭日小綬章」が授与された。その伝達式が去る6月14日に在ポーランド日本国大使館において、彼の友人、知人および内外関係者を招待して、山中駐ポーランド全権大使により執り行われたので、その模様を報告する。

クヴィエチンスキ氏と空手の出会いは、今から40年前（1972年）、当時、私の兄（霜田千代麿）が演劇修行のためポーランドに留学し、ウッジ市でポーランド語を学んでいたときに遡る。これは私が2008年に初めてポーランドを訪問した折、氏から伺ったことであるが、ウッジ市の路面電車の中で日本人の兄を見かけ、氏と彼の友人の2人で話しかけたことがきっかけとなったようである。兄は大学時代に伝統空手を学んで有段者であったことから、話の中で空手に興味を持った2人にそれを教えることになったことが、現在のポーランド伝統空手道連盟（略称PZKT）の基礎を築くことに繋がっている。その後氏はポーランド（本部：ウッジ）を武道の拠点として、欧州（本部：ミラノ）および世界（本部：ロスアンジェルス）の伝統空手道普及の中心人物となって尽力している。

私がワルシャワに到着したのは伝達式前日（6月13日）の夜であるが、折しもポーランドとウクライナで開催中の2012年欧州サッカー選手権の最中であり、ホテル宿泊費は彼が「クレージー」というほど高く、彼の息子ヴィテックによる迎えの車で、ワルシャワ空港からそのまま80km南に位置するポーランド第2の都市ウッジ市のホテルへ向かった。ホテルでは、カナダからやって来たITKF議長でオランダ系カナダ人のリチャード・ヨルジェンセン氏（愛称リック）と合流し、皆で遅い夕食を囲み再会を喜んだ。ホテルはロフト・アパートと呼ばれ、19世紀から20世紀のポーランドにおける繊維産業の中心となった工場を2010年にリニューアルしたもので、一部を分譲とする重厚な3階建レンガ造りの建物に、最新の設備を備えたものである。

綬章式当日のウッジは、あいにく朝から大雨であった。彼の奥様ターシャとリックとともに、彼の運転するオフロード用の車で朝9時にウッジ市を出て、お昼頃にワルシャワ市内に入った。幸いワルシャワに入ると雨も上がり、時折薄日も射してきた。大きな川（ヴィスワ川）のほとりで、外国からの大勢のサッカー・ファンで賑わうサッカー場の近くを抜けると、まもなく日本大使館である。到着して車を降りると、北海道出身で秘書役の寺田頼子さん（専門調査員）が待っていて、我々を大使館の控え室まで案内して、いろいろとお世話をしてくれた。クヴィエチンスキ氏は礼服に、また奥様はこの日のために日本の着物にそれぞれ着替え、一方、すでに到着していた彼の弟子達は伝達式後に行われる空手の演舞について綿密な打ち合わせを行うなど、辺りには徐々に式典前の緊張感が高まって来た。やがて寺田さんが式典会場の大使公邸へ我々を玄関前まで案内してくれると、それと時を合わせたようにヴィテックが氏の年老いた両親を玄関前までエスコートして、皆が一緒になって公邸に入り、大使ご夫妻の歓迎を受けた。会場は日本大使公邸の大広間で、既に出席者が大勢詰めかけていた。或人は食前酒を片手に、氏ご夫妻、ご両親と和やかに挨拶を交わし、それぞれ式の開始を待った。

出席者は兄の代わりに出席した私を含め、主としてクヴィエチンスキ氏による招待者であるが、来賓としてスポーツ観光大臣のジョアンナ・ムハ氏、7月に着任した駐日ポーランド大使のツィリル・コザチェフスキ氏、両省庁の報道官、内外空手道関係者などの他、多数のメディア関係者である。カナダから出席したITKF議長のリックをはじめ、空手道関係者はポーランド本国からは言うまでもなく、ロシア、ウクライナ、リトアニア、オーストリアなど周辺国からの出席者も多く、総勢90名程度（大使館）ということである。

式典では冒頭中山大使より綬章理由が説明され、その後、証書授与とともに、クヴィエチンスキ氏の左

氏「旭日小綬章」出席して

霜田 英麿

ご両親と綬章時の記念撮影。後列左は山中全権大使ご夫妻。右はスポーツ観光大臣ムハ氏。

胸に「旭日小綬章」が付けられた。続いてムハ大臣による祝辞があり、最後に本人の感謝の言葉があって、無事伝達式典の儀式は終了した。その後皆の賛辞を受けながらの記念撮影がしばらく続き、いよいよアトラクションとして、クヴィエチンスキ氏が説明役となって、PZKTの主要メンバー18名による伝統空手の演舞が、式典場に隣接する中庭で厳粛かつ勇猛に披露され、出席者の喝采を浴びた。後日寺田さんによると、大使公邸での演舞はとてもすばらしく、大使ご夫妻も大変喜んでおられたということである。アトラクションのあとは、公邸で調理されたお寿司と和洋食の立食パーティで、改めてクヴィエチンスキ氏と彼の家族を讃え、それぞれ親交を深め合った。実は氏はウッジ市からワルシャワへ向かう車の中で、しきりに降りしきる雨を心配していたが、思い通りの演舞が何事もなく鮮やかに執り行えたことへの満足感からか、その後の宴で彼の笑顔が絶やされることはなかった。

式典終了後、連盟関係者とともに、ワルシャワから一路ウッジの日本武道場（Japanese Martial and Sports Centre: Dojo-Stara Wies）へ向かい、現地時刻午後11時頃に到着した。皆はなんとなくそのまま食堂に集まり、ビールのスタウト瓶を開けて祝杯をあげ、この良き日を締めくくった。

そして翌日を迎えると、昨日とは打って変わって快晴で、大自然に囲まれた道場周辺は、私の育った郷里、北海道の風景とも重なってとても心地よかった。建設中に一度訪れてはいるが、完成した道場、合宿所を見るのは初めてである。道場は国立公園に隣接する約64ヘクタールの広大な丘陵地で、更に拡張の予定があるとのことで、おそらく欧州における日本武道の中心というより、世界的な日本武道の中心的な施設といえるのではないかと思われる。

14日の伝達式のあと、16日には道場の迎賓館とも言える食堂において、PZKTおよびクヴィエチンスキ氏ご夫妻主催による、ごく親しい関係者を招待しての感謝を込めての祝賀会を改めて行った。その夜は、おいしい地元料理とウォッカをすこぶる堪能した。その晩は丁度サッカーのポーランドとチェコ戦があるとのことで、チェコから参加した（実は滞在中私と合宿所をともにした）何れもラデックという名の二人の若者は、国旗を振りながら盛んに自国の名を叫び続けると、会場は大いに盛り上がった。多勢の声援にも関わらずポーランドの負けが決まると、仲間は皆暖かくチェコの若者達を讃えていたのが印象的である。

翌17日は、午前中にほとんどの滞在者が次々と道場を去り、私と合宿所を共にしたもう一人、ウルグァイ出身で、モロッコで空手を教えているという、ネルソン・カリオン氏とクヴィエチンスキご夫妻、そして彼の秘書だけとなった。その日も少々雲は出てきたが、とてもさわやかな日で、広大な丘陵地帯に小鳥の声が一段と新鮮に響き渡っている。日曜日ということもあってか、お昼前後にかけて数台のバスを連ねて、見学者が次々と大勢道場へ出入りする度に、彼の奥様が案内役となって丁寧な説明をされていた。

その日の午後、7月の新任を控えていた駐日ポーランド大使、コザチェフスキ氏ご家族が道場を訪問されたのには少々驚いた。ご自身もそうであるが、奥様と2人の小学生の娘さんを連れて日本に着任する前に、畳と布団で寝泊まりする和式の合宿所と道場を訪れて、少しでも日本文化に触れさせたいとの意向のようであった。クヴィエチンスキ氏ご夫妻とカリオン氏とともに、コザチェフスキ氏ご家族を道場、合宿所へ案内した。その後、パヴェル（クヴィエチンスキ氏の片腕）の運転するジープで、ほとんどオフロードの鬱蒼とする林間を抜けて広大な敷地内を周回して戻って来た。子供達が大はしゃぎしていたのは言うまでもない。

道場訪問（左から）筆者・ク氏の奥様ターシャ夫人・コザチェフスキ駐日大使奥様・お子様と大使・カリオン氏。

しもだ・ひでまろ
（北海道ポーランド文化協会東京事務所）

ポーランド再訪

霜田 千代麿

日本-ポーランド国交 90 周年記念「武道館オープニング」イベントに招待された筆者（左から２人目）。レフ・ワレサ元大統領（右端）。
2009 年 10 月 10 日　ウッチ県「古い村」にて

このたびポーランド『伝統空手道連盟』創立 40 周年記念と世界大会に招待され、ポーランド共和国を訪問した。

丁度、小生が演劇で留学した 1972 年は札幌冬季オリンピックの年であった。90 メートル級ジャンプでポーランドのフォルトゥナ選手が 111 メートルで金メダルを取った。偶然のきっかけから、空いている時間、大学時代に修行した松濤館流の空手を指導する事になった。あれから 40 年、現在、全ポーランドで、成人男女から子供まで 3 万人の男女が空手道に励んでいる。

ウッチで開催された今年の世界大会の場では、ベネズエラから来た石山師範や、先祖は美唄市の出身だというブラジルの渡邊師範にお会いした。2 人とも 50 年近く現地に生活し現在も空手の指導をしている。来賓で沖縄選出の衆議院議員の瑞慶覧長敏氏やスティーブ中田氏（再会）とも会う事が出来た。来年秋、沖縄で首里杯の空手道世界大会を企画中との事であった。

現在、ポーランド、ワルシャワの大型書店をのぞくと、新渡戸稲造の『武士道』を始め、宮本武蔵『五輪書』柳生宗矩『不動智神妙録』がポーランド語に訳されて出ている事に、以前、訪問した時、驚いた。この国の人々は日本の武道に対し特別な関心を持っている。

北海道ポーランド文化協会に縁の深い人々を訪ねてみた。ポズナンの津田御夫妻宅に一泊した。奥さんモニカ（俳号、陽石）さんの手料理、スープ、ジュレックは最高だった。又、ウッチ大学の吉田教授を研究室に訪ね、大変なつかしい時間を持つ事が出来た。ここに深くご両人へ感謝申し上げたい。

Agnieszka Żuławska-Umeda
アグネェシュカ・ジュワフスカ―梅田
Poetyka szkoły Matsuo Basho
(lata 1684-1694) wydawnictwo Neriton
『松尾芭蕉一派の詩学（1684-1694 年）』ネリトン出版

なお、上記の著作で有名なアグネェシュカ梅田さん（ワルシャワ大学日本文学科教授）の御主人であられる梅田芳穂氏が今年亡くなられました。
茲に深悼す。

しもだ・ちよまろ（副会長）

東日本大震災被災者支援プロジェクトを伝える「ポーランド伝統空手道連盟」のホームページ

ポーランドにおける日本の伝統武道に対する関心は非常に高く、柔道、空手、合気道、相撲、剣道等がとても活発

ポーランドだより

変わりゆくポーランドのお盆

津田 晃岐

私はこの４年間、ポーランドの西部の町、ポズナン市に住んでいる者だが、かつて北海道大学で学んでいたことから、札幌とも縁が深い。また、東京外国大学のポーランド学科にいた時には、ポーランド政府の奨学金をもらい、1998 年から 2000 年にかけてクラクフ市に留学することができた。現在、ポズナン市のアダム・ミツキェヴィチ大学で教えていながら、ポーランド人がいかに日本を見ているか、そしてポーランドがどのように変わったかを興味深く眺めている。そこで、変わりゆくポーランドの現在について報告を勧められた切っ掛けもあり、喜んで筆を執ったものである。

1.「諸聖人の祭日」？それとも「死者の祝日」？

11 月の初め、ポーランドでは「お盆」の季節である。会社も学校も休みとなり、町の中心部は比較的静かになる。一方、墓地のある郊外では、俄然にぎやかさを増す。多くの家族がこぞって墓参をするためである。墓地の入口付近では、色ガラスの瓶に入った墓前灯「ズニチュ znicz」や生花を、量の面でも種類の面でも、いつもより充実させた屋台が軒を連ねている。また、この時期に食べられることの多い生姜入りクッキー「ピェルニク piernik」や、私の住むポズナンでは名物の蜂蜜味の煎餅「ポズナン管 rura poznańska」（日本の瓦煎餅に似ており、大きな管の一部を切り取ったように反り返っている）を売る露店も出現する。墓地の周辺は自動車でごった返し、当然、渋滞ができ、あちこちに臨時駐車場が設けられ、中央分離帯にさえ車を止めている。警察官による交通整理が延々と続けられ、夜遅くまで誘導等を灯しているからだろうか、この「お盆」期間中の墓地周辺の交通規制も、警察用語で「ズニチュ」作戦と呼ばれる。

ポーランドの「お盆休み」について厳密に言えば、11 月 1 日は「諸聖人の祭日 Uroczystość Wszystkich Świętych」と呼ばれ、ローマ・カトリック教会の定める祭日であり、すべての聖人および殉教者を記念する日とされている。ポーランド共和国の法律でも、国家の「休日」として制定されている。

一方、11 月 2 日は、カトリック教会では通常「死者の日 Dzień Zaduszny」と呼び、「亡くなった全ての信者の記念日 wspomnienie wszystkich wiernych zmarłych」としている。

カトリック教会では祝祭日を、重要度の順に「祭日」「祝日」「記念日」に分けている。「祭日」は、典礼暦上最も重要な日で、前晩から祝われ、「祭日」が金曜日に当たる場合も小斎（毎金曜日に義務付けられている、鳥獣の肉を摂らない食事制限）は免除される。代表的な「祭日」には、復活祭やクリスマスがある。ちなみに、毎日曜日は「主日」と呼ばれ、「祭日」と同等に扱われる。「祝日」は、前晩から祝われることはなく、当日のミサでも式次第が「祭日」と一部異なる。「記念日」は、カトリック教会あるいは当該教区全体で義務として祝う「義務の記念日」と、司式者の判断で任意に祝われる「任意の記念日」に分けられる。

ともかく、11 月 1 日が「祭日」であるのに対して、11 月 2 日の「死者の日」は「義務の記念日」として扱われる。もちろん、こうした教会の祝祭日の区分は、国家の法律が定める「休日」とは必ずしも一致しない。実際、ポーランドの現行法で「休日」として定められているのは 11 月 1 日のみで、2 日は国家の「休日」となっていない。そこで大抵の場合、会社や学校が自主的に休業したり、各自が個人的に休暇を取ったりして、週末と合わせて数日の「お盆休み」をもらい、墓参ついでに実家へ帰ってゆっくりする者も多い。そのため、11 月 1 日の「諸聖人の祭日」に、聖人や殉教者と関係なく、先祖や身内の墓を訪れる家族も多い。

墓参に来た家族は、墓石を洗ったり、周囲を掃除したり、新しい花を飾ったり、「ズニチュ」を灯したりして、先祖や最近亡くなった身内の安らかな眠りを祈る。カトリック教では、死後、小罪や償いが残っているために浄化を必要とする者たちは煉獄に留まるが、彼らの魂のために祈ることで、その浄化の期間が短くなり、早く天国に行くことができると信じられている。

ポーランドの「お盆」には、キリスト教以前のスラヴ民族の先祖供養の習俗「祖霊祭 Dziady」が透けて見える。ポーランドでは、この「祖霊祭」を伝統的に「慰霊祭 Zaduszki」と呼んでいる。キリスト教以前の民間信仰では、11 月 1 日に祖霊が家に戻ってくると信じられていた。当日かまどを使わなくてすむように、前

もって祖霊の数だけパンを焼いておき（当日に火を使うと火事になると思われていた）、11 月 1 日の晩に家族で集まり、祖霊のために祈り、帰ってきた祖霊をご馳走でもてなしたそうである。また、家の食卓ではなく、墓前に食べ物を供える風習もあったと言う。その後、キリスト教が受容され、土着の信仰と結びついたようだが、カトリック教会の定めた「諸聖人の祭日（11 月 1 日）」と「死者の日（11 月 2 日）」の区別は、伝統的な「慰霊祭」によって、かなり緩やかなものとなっている。教会も、それに関しては特に厳密な区別を強いていない。しかし、「諸聖人の祭日」と「死者の日」とが曖昧に混同されているのには、実はもう一つ理由がある。

11 月 1 日は、共産主義時代にも国家の「休日」であり続けたが、当局はこの日の宗教的意味合いを弱め、世俗的な性格を与えるために、「諸聖人の祭日」ではなく「諸死者の日 Dzień Wszystkich Zmarłych」あるいは「死者の祝日 Święto Zmarłych」と呼び習わし、これらの呼称を広めた。結果、それらの呼称は、今でも人々の記憶に残り、カトリック教会の「諸聖人の祭日」と重なり、結びつき、混同されることとなった。そして、「諸聖人の祭日（11 月 1 日）」＝「諸死者の日」＝「死者の祝日」＝「死者の日（11 月 2 日）」＝「亡くなった全ての信者の記念日」＝「慰霊祭」という、現在の緩やか連想のもと、人々は、特に厳密な区別を意識することなく、「お盆休み」を過ごしている。

2. ハロウィン

ポーランド語の「慰霊祭 Zaduszki」には、「死者の日 Dzień Zaduszny」という意味のほかに、その日にちなんだ行事という意味もある。その行事とは、もちろん、墓参や当日のミサへの参列に限らない。しかも、祖先や亡くなった身内に限らず、いろんな意味で親しかった故人を記念する行事をも含む。そして、それは「慰霊祭」の名に相応しく、「祭り」色の強いイヴェントの場合もある。

この時期、ポーランドでは、今は亡き芸術家を偲ぶ追悼イヴェントが各地で行なわれる。例えば、「ジャズ慰霊祭 Zaduszki Jazzowe」では、現役のジャズ・ミュージシャンが集まり、亡き巨匠たちの作品を演奏しながら、音楽と祈りとで巨匠たちを追悼する。ポズナン市の場合、ドミニコ会の教会で今年も行なわれた。もちろん、ジャズに限らず、ロック、パンク、フォーク、ブルース、クラシックなど、様々なジャンルの「音楽慰霊祭 Zaduszki Muzyczne」も開かれる。自分にとって身近で特別だった歌手や作曲家を思い出しながら、彼らが残してくれた作品を鑑賞する。また、「詩の慰霊祭 Zaduszki Poetyckie」もよく行なわれる。今は亡き詩人の詩を朗読し、それを聴きながら、詩人に思いを馳せたり、近く世を去った身内を思い出したりする。

また、1989 年の民主化以降、ポーランドには西側の習慣がどんどん流入しているが、2000 年前後から「ハロウィン Halloween（ポーランド語でもこのように綴られる）」の風習もアメリカ経由で入ってきている。10 月 31 日に祝われるハロウィンは、本来キリスト教と全く関係のない習俗だが、11 月 1 日の「諸聖人の祭日」や 11 月 2 日の「死者の日」と日付の上で近いため、伝統的な「慰霊祭」と結びつきながら、着実にポーランドの文化に根を下ろしつつある。

例えば、我が家の近所でも、ここ数年、子供たちがこの時期の夕方、お菓子や小銭を目当てに各家を訪ねて回るようになった。しかも、その子供たちは、アメリカのハロウィン・パーティさながら、魔女や死神の衣装で仮装しているのだ。当然のことだが、この時期の店舗のチラシや広告には、仮装のための衣装やアクセサリーがちゃんと売られているし、中には、カボチャをくりぬいた提灯「ジャック・ランタン」の既製品を売っている店もある。

また、毎年 10 月終わりになると、多くのパブや学校で、ときには幼稚園でも、ハロウィン・パーティが開かれる。それらのパーティは、軽いスリルを味わえる、罪のない仮装パーティを謳っているため、そこに見られるオカルト的な要素や反キリスト教的なモチーフに特別注意を払う者はいない。インタネット上でも、様々なハロウィン・パーティが宣伝されており、参加を誘う文句が氾濫している。中には、わざわざ 11 月 1 日の「諸聖人の祭日」にぶつけて、パーティを企画したパブもある。若者を中心としたパーティでは、新しい習慣であるハロウィンは、往々にして伝統への反抗精神、ロックやパンクやヘヴィ・メタルといった音楽、あるいはアルコールと結びついているようである。もちろん、魔女や死神、狼男や吸血鬼、ゾンビーなどの仮装も見られる。

しかし、このオカルト的な世界は、若者たちだけでなく、今や子供たちにとっても馴染みのものとなっている。ポーランドでも大人気となったハリー・ポッターの影響もあり、ハロウィンを祝うことは、もはや子供たちには普通のことになりつつある。子供のためのイヴェントとして、ハロウィンの提灯を作る親子工作教室なども開かれているが、提灯の色や柄こそ子供が自分で選ぶものの、そのモチーフたるや、やはり魔女や幽霊、吸血鬼やゾンビーといったものばかりである。

こうしたハロウィンの習俗については、キリスト教と無関係どころか、カトリック教会の教えに反対するとして、否定的な意見も少なくない。また、子供の成長の面からも、精神の発達に悪影響を与えるのではないかと憂える声も多い。

3.「信仰年」

こうして、カトリック教国として根強いイメージのあったポーランドも、今では少しずつキリスト教を離れていっている。「キリスト教世界の砦」を自負してきたポーランドでさえ、こうなのだ。現在のヨーロッパのキリスト教離れ、というよりキリスト教への反感や無関心は、日に日に強まっており、その勢いには驚くべきものがある。

そうした中、今年(2012 年)10 月 11 日、ローマ教皇ベネディクト 16 世は、これからの一年間を「信仰年 Rok Wiary」とすることを定めた。それは、第二ヴァティカン公会議(1962～1965 年)の開幕 50 周年を契機に始められたもので、2012 年 10 月 11 日から 2013 年 11 月 24 日「王であるキリストの祭日」までの約一年である。キリスト教徒が自らの信仰について学び、再発見し、キリスト教徒であることに喜びを見出し、再び真の信仰へと立ち返り、それを通して周囲にも福音を伝えていくことを目的としている。

第二ヴァティカン公会議については、20 世紀の最も重要な改革を行なった公会議で、カトリック教会の現代化を目指し、教会の制度や活動、教義、典礼などについて大幅な刷新が成された。公会議によって導入された変化は、枚挙に暇がないが、最も分かりやすい例としては、それまでラテン語でのみ行なわれていたミサが自国語で行なえるようになったことが挙げられる。

「信仰年」の開年は、ポーランドでは冷静に、しかも概ね好意的に、受け容れられている。少なくとも感情的な反発は起こっていない。メディアにおいても、保守派や愛国者、敬虔な信者を中心に、現代社会の精神的な荒廃や危険性、信仰の危機、そして国民あるいは個人の精神的支柱としての信仰の重要性が、ヒステリックな論調ではなく、訴えられ始めている。また、ポーランドの各地でも、すでに様々な行事が企画されつつある。例えば、大人のための「宗教」の授業、宗教的な映画の上映、ローマをはじめ世界の聖地への巡礼ツアー、スローガンを掲げての街頭行進、あるいは信仰をテーマにした討論会や学会やパネル・ディスカッションなどが行なわれる予定になっている。

そして、この「信仰年」に発する福音伝道の余波は、私のところにも到達した。「信仰年」開年に合わせて封切りを迎えられるように、映画の日本語字幕の制作を依頼されたのだ。それは『芸術と信仰――ヴァティカンの宝』というドキュメンタリー映画で、ヴァティカン美術館の所蔵品を、キリスト教の歴史とともに紹介したものである。映画は、ヴァティカン市国委員会の依頼のもと、ヴァティカン美術館とポーランドの映画制作会社 TBA が共同で制作した。ポーランドとヴァティカンの初めての合作というだけでなく、そもそもヴァティカンにとって自ら制作に関わった初めての映画だそうである。先日、ローマ教皇もこの映画を鑑賞したことがニュースになっていた。11 月から DVD として販売され、各国のテレビでも放映されるそうである。配給元はヴァティカン美術館である。

教皇は、サンピエトロ広場で行なわれた「信仰年」開年ミサの説教で、こう述べた。

> 最近の数十年間、霊的な「砂漠化」が進行しています。神のない生活と世界がどのようなものであるか――公会議の時代にも、それをいくつかの歴史の悲惨な出来事から知ることができました。しかし、残念ながら、現代のわたしたちはそれを日々、身の回りで目にすることができます。この空白は広がりつつあります。
> (カトリック中央協議会　司教協議会秘書室研究企画訳)

現在、ほとんどヨーロッパにおけるキリスト教最後の牙城となっている観のあるポーランドに住んでいて感じるのは、「ヨーロッパ＝キリスト教」という図式が、もはやとうの昔の話になってしまった、ということである。そして、ポーランドもまた、同じ轍を歩んでいる、ということである。ヨーロッパの各国と同じように、ポーランドでも、脱キリスト教化は進んでいる。長年ヨーロッパを異教徒から守ってきた「キリスト教世界の砦」として、さらに去年列福された前教皇ヨハネ・パウロ 2 世を輩出した国として、他国に比べれば、まだまだキリスト教の伝統は残っている。しかし、高まる経済的な豊かさとは裏腹に、精神的な「空白」、心の「砂漠化」は確実に進んでいる。「ヨーロッパ＝キリスト教」という図式がもはや過去の遺物となってしまったように、「ポーランド人＝カトリック教徒」が当たり前でなくなる日も、そう遠いことではないのかもしれない。

つだ・てるみち(ポズナン外国語大学講師)

今後の活動予定

◆<第 64 回例会>ジャズライブ de ポランスキー
～傑作短編セレクション＆ジャズ～

12 月 4 日（火）19 時～
札幌プラザ 2・5（狸小路 5）
※　詳細は同封のフライヤーをご覧いただき、お誘い合わせのうえご参加ください！

◆<第 64 回例会> ポーランド映画セレクションⅢ

2013 年　5 月 25-26 日（土日）
北大学術交流会館講堂　予定

今年度もどんどん活動します！
皆様のご理解とご支援を宜しくお願い致します。
サポーターも随時募集します。

新入会員のご紹介

阪本ひろむさん（10 月）、奥村喜久美さん（11 月）が入会されました。どうぞ宜しくお願い致します。
（副事務局長・栗原）

新年度の会費納入のお願い

（2012 年 10 月～～2013 年 9 月分）

当会は、皆様からの年会費のみで運営されています。本年度分の会費の納入を同封の払込票をご利用の上、宜しくお願いいたします。

【郵便振替口座】
02740-5-19735
北海道ポーランド文化協会

◆普通会員（年額）3000 円
◆維持会員（年額 1 口）5000 円
◆学生会員（年額）1500 円

＜連載俳句＞

ポーランド & ニッポン歳時記

人ほろびず大地ほろびず天高し
（天高し－秋）

秋の陽を浴びてヴィスワの都鳥
（秋の陽－秋）

ワルシャワや猫の鳴き声霜の城
（霜の城－秋）

千代磨

アンテナに冬入り会議の鴉かな

陽石

冬に向けて

ポーランドの新学期は十月に始まる。十一月は授業が行われる一方で、会議も多い。それは、十二月になるとクリスマス休暇があり、時間がないところへ持ってきて、新年に向けた準備をしなければならないからである。夫が午後の会議にしばしば出かけるので、ふと周りじゅうが冬に向けて準備を始めたような気がする。

Na dachu kamienicy
Na antenie zebranie
Kruków przed zimą

＜ポズナン市在住。ポーランド人女性 陽石さん＞

幼いころから文学に親しみ、特に日本の文学に興味を覚える。俳句は三年前から詠みはじめる。

POLE
第 77 号　ポーレ編集委員会
http://hokkaido-poland.com/
氏間多伊子　栗原朋友子
佐光 伸一　ラファウ・ジェプカ

北海道ポーランド文化協会会誌
POLE 第 77 号（2012 年 12 月）

目　次

北海道ポーランド文化協会創立 25 周年！ツィリル・コザチェフスキ駐日ポーランド共和国特命全権大使の祝辞・・・ 1
第 26 回 [2012-2013 年度] 定期総会報告 [2012.11.3]、小林暁子「創立 25 周年祝賀会報告」・・・2
霜田英麿「クヴィエチンスキ氏“旭日小綬章”伝達式に出席して」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
霜田千代麿「ポーランド再訪」・・ 8
津田晃岐〈ポーランドだより 9〉「変わりゆくポーランドのお盆」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9
霜田千代麿・陽石 [津田モニカ]〈ポーランド＆ニッポン歳時記〉／ [事務局より] 今後の活動予定：ジャズライブ de ポランスキー、ポーランド映画セレクションⅢ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12